

■部局横断型「死生学・応用倫理教育プログラム」2019年度開講科目
(教室などは変更されることがあるので、必ず開講部局でご確認ください。)

□必修科目

文学部04190031

准教授 堀江 宗正ほか「死生学概論」(死生学の射程) S1+S2 木 文学部3番大教室

死生学に関連する研究をおこなっている文学部・人文社会系研究科の教員が、死生学の主なトピックを取り上げて、現在の研究状況を概説する。それぞれ、人間の死と、死にゆく過程での生をめぐる諸問題、またそれらに関する思想や実践が取り上げられる。死生に関する多様なアプローチを学び、学際的思考の基礎を養う。なお、本講義は「応用倫理概論」と共に、部局横断型プログラム「死生学・応用倫理教育プログラム」の基幹講義である。

- 第1回 4月11日 堀江宗正 死生学とは一人間の生と死
- 第2回 4月18日 池澤優 死生学と宗教—《死者性》の視点から
- 第3回 4月25日 芳賀京子 古代ギリシアの死と美術
- 第4回 5月9日 佐藤至子 江戸文学にみる死と生
- 第5回 5月16日 蓑輪顕量 仏教からみた死生
- 第6回 5月23日 榊原哲也 生きる意味を支えるもの—現象学からのアプローチ
- 第7回 5月30日 高野明 大学生の自殺予防
- 第8回 6月6日 井口高志 死生とケアの社会学
- 第9回 6月13日 早川正祐 ケアの死生学—病苦の語りとケア
- 第10回 6月20日 会田薫子 臨床現場の死生学
- 第11回 6月27日 小松美彦 「個人閉塞した死」と「共鳴する死」
- 第12回 7月4日 白岩祐子 死者の存在知覚—心理学からのアプローチ
- 第13回 7月11日 堀江宗正 まとめ—他者の死と自己の死
- 第14回 7月25日 試験

文学部04190061

教授 池澤 優ほか 「応用倫理概論」(応用倫理入門) S1+S2 金3 法文二号館一番大教室

科学と技術が我々の生活を飛躍的に便利にし、膨大な情報をもたらし、寿命を延ばすに従い、これまでは考えられもしなかった様々な問題が生まれてきた。果たして人間にとって科学技術とは何なのか、何であるべきなのか。いま現在生きている人間たちだけの経済や効率を技術的に優先させた合理性は、はたしてまだ存在しない次の世代に、理不尽な負担を押しつけることにならないのか。そうした哲学的・思想的であると同時に実践的・現実的な諸問題を根本から問い直すべく、生命倫理、環境倫理、技術倫理、情報倫理、さらには世代間倫理といった、いわゆる「応用倫理」といわれる新しい学問領域が、いま強く求められてきている。本講義は、その分野に関する俯瞰的な概説を行うものである。

応用倫理は、本来的に幅広い分野を包含し、多様な方法論を必要とする分野であるため、本年度はオムニバス形式で生命倫理、臨床倫理、環境倫理、研究倫理、現代倫理、技術倫理に関して順次講じていく予定である。担当講師と講義内容は以下の通りである。

- 第1回 4月5日 池澤 優 イントロダクション
- 第2回 4月19日 池澤 優 環境倫理(1) 非人間中心主義
- 第3回 4月26日 池澤 優 環境倫理(2) 人間と自然の対立を越えて
- 第4回 5月10日 小島 毅 環境倫理(3) 環境と文化—水について

第5回 5月24日 出口剛司 現代倫理 愛するということと悪について—エーリッヒ・フロムの思想

第6回 5月31日 堀江宗正 世代間倫理 「反原発運動の倫理」を考える

第7回 6月7日 池澤 優 生命倫理(1) 生命倫理の成立

第8回 6月14日 池澤 優 生命倫理(2) パーソン論とオルタナティブな論理

第9回 6月21日 小松美彦 生命倫理(3) 脳死・臓器移植

第10回 6月28日 会田薫子 臨床倫理 医療とケアの意思決定支援

第11回 7月5日 西村 明 戦争と記憶 たましいへの感受性—爆心地と戦地の慰霊から

第12回 7月12日 池澤 優 まとめ

(なお副題は仮のものである。担当教員と順番は変更することがある。)

本講義は「死生学概論」とならび、部局横断型プログラム「死生学・応用倫理教育プログラム」の基幹講義である。

□選択必修科目

文学部04190051

教授 小松 美彦「死生学演習Ⅰ」(生権力・生政治論の新展開) S1+S2 水4 法文一号館116教室
医学・医療・科学にとって、人間の身体とははたして何なのか。この学問的かつ日常的な生身の問題を、生権力・生政治の観点から歴史的に検討する。具体的には、フーコーの再来と言われるフランスの哲学者シャムユアの著書『人体実験の哲学—「卑しい体」がつくる医学、技術、権力の歴史』(明石書店、2018年)をテキストとして、近代の西欧世界で行われた刑死体の利用や数々の人体実験について考察する。そして、その考察作業を通じて、日本の731部隊の問題はもとより、今日の脳死・臓器移植や安楽死・尊厳死の問題を再考する視点を獲得する。

文学部04190052

准教授 堀江 宗正「死生学演習Ⅱ」(批判的死生学) A1+A2 金2 法文一号館116教室

死生学においては臨床実践に関わる著者の影響力が大きい。その主張、論点に、人文社会系の学問の立場から批判的な検討を加えることは、死生学の発展において極めて重要である。この演習では、そのような批判的視点を提供する理論的な著作・論文を中心に読み進めてゆく。今年度は、Tony Walter, *What Death Means Now*を読む。

文学部04190053

教授 池澤 優 「死生学演習Ⅲ」(死生学基礎文献購読) A1+A2 金3 法文一号館319教室

本演習は今まで、シリーズ『死生学』全5巻(2012年度)、アリエス『死を前にした人間』、ゴラー『死と悲しみの社会学』、キューブラー=ロス『死ぬ瞬間』、加藤周一ほか『日本人の死生観』、エルツ「死の宗教社会学」(2013年度)、ニーメイアー『喪失と悲嘆の心理療法』、樽川典子『喪失と生存の社会学—大震災のライフ・ヒストリー』、デーケン『新版 死とどう向き合うか』、シュナイドマン『シュナイドマンの自殺学』、新谷尚紀『お葬式』(2014年度)、清水哲郎『ケア従事者のための死生学』、平山正実『死生学とはなにか』、石丸昌彦編『死生学入門』、岸本英夫『生と死』、竹内整一『花びらは散る 花は散らない』、島藺進『日本人の死生観を読む』、森岡正博『生者と死者をつなぐ』(2015年度)、ジャンケレビッチ『死』、ヴィクトール・フランクル『死と愛—実存分析入門』、宇都宮輝夫『生と死を考える—宗教学から見た死生学』、澤井敦・有松賢『死別の社会学』、高橋祥友『自殺予防』(2016年度)、アーネスト・ベッカー『死の拒絶』、門林道子『生きる力の源に—がん闘病記の社会学』、山本俊一『死生学のすすめ』、高橋聡美編『グリーンケア—死別による悲嘆の援助』(2017年度)、ジャン・ボードリヤール『象徴交換と死』、ロバート・リフトン『ヒロシマを生き抜く—精神

史的考察』、カステンバウム『死ぬ瞬間の心理』、ミルトン・メイヤロフ『ケアの本質—生きることの意味』（2018年度）を講読してきた。本年度は比較的最近出版された書を主対象として、以下の4冊を読みたいと考えている。

シェリー・ケーガン、柴田裕之訳『「死」とは何か？—イェール大学で23年連続の人気講義』、文響社、2018。

岩崎大『死生学—死の隠蔽から自己確信へ』、春風社、2015。

大林雅之『生命の問い—生命倫理学と死生学の間で』、東信堂、2017。

高橋隆雄『生命・環境・ケア—日本の生命倫理の可能性』、九州大学出版会、2008。

講読する書は多方面に及ぶが、現代的な諸問題に対面する中で、死生学という領域が如何なる視点と方法論を開拓しようとしているかを考えてゆくのが基本的な目的である。

文学部04190054

特任准教授 早川 正祐「死生学演習Ⅳ」（病いの語りをめぐる倫理） S1+S2 水2 法文一号館219教室

人間は、病いととも生きていくことを余儀なくされたとき、これまで自明視していた自分の人生の意味を深く問い直すようになる。このような意味の問い直しの過程で、当事者が語るということや他者がそれを聞き届けるということは、極めて重要な役割をもっている。しかしながら、ここで注意すべきは、病いの苦しみを語ることやそれを聞き届けることが、多くの場合、困難に満ちたものになるという点である。それゆえ、その困難さを念頭に置きつつ、病いをめぐる体験とその意味について考察することが求められる。

そこで本演習では、病いに関する物語論の古典であるアーサー・フランクの『傷ついた物語の語り手—身体・病い・倫理』=Arthur W. Frank, *The Wounded Storyteller: Body, illness, and Ethics* を講読する（訳本でも可）ことで、病いの語りがどのような複雑な意味と効果をもつのかをその社会的含意も含めて考えていく。より具体的には、病いの語りの三類型である回復の語り・混沌の語り・探究の語りがどのようなものであるのか、また相互にどのような関係にあるのかを考察する。それと同時に、コミュニケーション・身体・脆さ（vulnerability）・傾聴・証言・痛み・多声性といった臨床倫理における重要概念が、どのように捉えられているのかを検討する。とりわけ、ポジティブな回復の語りをはらむネガティブな性格や、私たちの身体や生産性重視の社会がはらむ閉鎖的・排他的な側面等を批判的に見ていく。そのことを通して、従来の臨床倫理では見落とされている、病いの複雑な体験に根ざした倫理や責任のあり方、またコミュニケーションのあり方を根本的に考察する。

文学部04190081

教授 小松 美彦「応用倫理演習Ⅰ」（科学的生命観と人生論的生命観Ⅳ） A1+A2 水4 法文一号館116教室

従来の米国型生命倫理学では、そもそも「生命」が何であるかは、ほとんど論じられてこなかった。そこで、科学が「生命」をいかに考えてきたのかを歴史的に考察すべく、18世紀西欧の生理学の代表的な文献であるグザヴィエ・ビシャ『生と死の生理学研究』、シャルル・ボネ『有機体の考察』（いずれも邦訳）、もし余裕があれば『百科全書』の「生命」の項目を輪読し、討議する（ただし、これらの翻訳書は製作中であり、開講時に出版されていない場合は、クロード・ベルナル『動植物に共通する生命現象』にテキストを変更する）。そして、現代の生命観と対照する。

文学部04190082

教授 池澤 優 「応用倫理演習Ⅱ」（環境倫理文献購読） S1+S2 火5 法文一号館219教室

本演習では今までJ. Miller, D. S. Yu, & P. van der Veer ed., *Religion and Ecological Sustainability*

in China, M. Tucker & D. Williams ed., *Buddhism and Ecology: the Interconnection of Dharma and Deed* (2015年度)、リン・ホワイト『機械と神—生態学的危機の歴史的根源』、ロデリック・ナッシュ『自然の権利』、アラン・ドレングソン、井上有—『ディープ・エコロジー—生き方から考える環境の思想』、ピーター・シンガー『動物の解放』、J. E. ラブロック『地球生命圏—ガイアの科学』、トマス・ベリー『パクス・ガイアへの道—地球と人間の新たな物語』(2016年度)、ファン・ポッター『バイオエシックス—生存の科学』、アルド・レオポルド、『野生のうたが聞こえる』、岩崎茜『アルド・レオポルドの土地倫理—知的過程と感情的過程の融合としての自然保護思想』、石山徳子『米国先住民と核廃棄物—環境正義をめぐる闘争』、ジョン・パスマア『自然に対する人間の責任』、鬼頭秀一『自然保護を問いなおす—環境倫理とネットワーク』(2017年度)、ウルリヒ・ベック『危険社会—新しい近代への道』、ベアード・キャリコット『地球の洞察—多文化時代の環境哲学』、ジェームス・スワン『自然のおしえ 自然の癒し—スピリチュアル・エコロジーの知恵』、桑子敏雄『生命と風景の哲学—「空間の履歴」から読み解く』(2018年度)など、環境倫理に関する著名な著作を講読してきた。本年度も継続して環境倫理における「古典」を講読していく。

今までの講読で明らかになったのは、いわゆる応用倫理と呼ばれる分野の中には、意識的である場合も無意識的な場合もあるにせよ、何らかの宗教的な感覚が入りこんでいるということであろう。現代社会における宗教は、既に宗教であることを標榜する団体によってのみ担われているのではない。本人が意識していない場合でも、宗教的な論理や感覚が非宗教的(世俗的)な領域に浸透しており、それが現代における宗教という景観の一面を構成しているのである。講読を通して、そのような現代的宗教性を明らかにしていきたいと考えている。

本年度は以下の書を読むことを予定している。

シュレーダー=フレチェット編、京都生命倫理研究会訳『環境の倫理』2巻、晃洋書房、1993。
クレッカー&トゥヴォルシュカ編、石橋孝明ほか訳『環境の倫理』(諸宗教の倫理学—その教理と実生活 第5巻)、九州大学出版会、1999。

R.D.ソレル、金田俊郎訳『アッシジのフランチェスコと自然—自然環境に対する西洋キリスト教的態度の伝統と革新』、教文館、2015。

福永真弓『多声性の環境倫理—サケが生まれ帰る流域の正統性のゆくえ』、ハーベスト社、2010。

但し、講読する本は変更することがあり得る。

文学部04190083

准教授 堀江 宗正「応用倫理演習Ⅲ」(未来倫理の探究) S1+S2 金2 法文一号館116教室

未来倫理に関する文献を読み、応用倫理との接続について考え、議論を深める。

今年度は持続可能性の古典的な著作であるハーマン・E・デイリー『持続可能な発展の経済学』を読む。成長経済に対して定常経済を唱えるこの著作は、経済学のみならず、自然と人間の関係を広く扱い、宗教にまで言及する。

未来世代のために、われわれはどのような生き方をするのが望ましいのかを、この著作を通して考えていきたい。

文学部04190084

特任教授 会田 薫子「応用倫理演習Ⅳ」(質的研究法入門) S1+S2 火5 法文一号館319教室

社会における事象の捉え方には大別すると量的研究法と質的研究法があり、保健・医療・福祉また心理学分野においては特に数量的なアプローチが主流であったが、近年、個人およびグループ面接や観察によってデータを得る質的研究法の有用性が広く知られるようになり、この方法で研究に取り組もうとする研究者も増えてきた。しかし、手法・手続きが整えられ評価法も確立された量的研究法とは異なって、質的研究法を学ぶことは容易ではないと言われている。

本科目では、質的研究法の入門編として、質的研究法の世界を概観し、質的研究法を用いた原著論文の詳細なクリティークを通して、質的研究法の特徴を理解し、研究法と論文作成法を具体的に把握し、また、事象の捉え方に関して視野を拡大することを目標とする。

□選択科目

文学部04190041

准教授 堀江 宗正「死生学特殊講義Ⅰ」（日本人の死生観） S1+S2 火3 法文一号館212教室

「日本人の死生観」とはどのようなものか。この問いに短く答えることは難しい。それほど複雑だからである。歴史的な穴も多い。過去の思想家が残した死生観に頼ろうとしても、現代人の死生観と関係があるか、それともその思想家の特殊な死生観でしかないのか、という疑問が残る。現代人だけに範囲を限定しても、多様な死生観がある。宗教観以上に曖昧で複雑な現代日本人の死生観にどのようにアプローチするか。すでにあるアプローチから、突破口を考えてゆきたい。

文学部04190042

教授 榑原 哲也「死生学特殊講義Ⅱ」（死生のケアの現象学） S1+S2 金5 法文一号館314教室

看護ケア理論や看護ケアの質的研究において、現象学という哲学が注目を集めて久しい。それは、あらゆる事象を「生活世界」における「意味」体験の次元から捉え直そうとする現象学的哲学の営みが、個々の患者やその家族の「病い」の体験を理解する視点と、それに対処する方途を与えようと期待されているからである。

本講義では、「現象学」という哲学の基本的な理解をもとに、「ケア」がどのような営みであり、また死生のケアにはどのような視点が必要かを、受講者が理解できるようになることを目標とする。

「疾患」と「病い」の区別を手がかりにしつつ、自然科学的・医学的なものの見方の特徴とその哲学的背景を明らかにしたあと、そうした見方では捉えられない生活世界的意味経験とケアの営みを、現象学という哲学がどのように明らかにしていくのかを、主としてベナーの現象学的人間観と現象学的看護理論に即して概説する。さらに、わが国で近年展開されている現象学的看護研究を概観し、「死生のケアの現象学」のさらなる可能性について考えたい。

文学部04190043

非常勤講師 澤井 敦 「死生学特殊講義Ⅲ」（死と不安の社会学） S1+S2 月2 法文二号館二番大教室

普段あまり考えることはなくても、何かのきっかけから、自分はなぜ生きているのだろうと「生きる意味」を問う瞬間が誰の人生にもあるだろう。そうした問いについて考える時、「生」には「死」という終わりがあるという事実が否応なく私たちに迫ってくる。

とはいえこの死、とりわけ自分の死について、普段あまり考えることはないかもしれない。ただ、あまり考えることがなくても、死という終焉が必ず訪れるという事実は、漠然とした不安感となって、私たちの生をなかば無意識のうちに覆うものとなる。

哲学・心理学・精神医学などにおいて、以上のような事態はさまざまなかたちで考察されてきた。ただ、この授業でとりわけ焦点を当てたいのは、端的に言えば、死や不安の社会的様相である。

死という不可解かつ不可知の現象は社会的にどのように処理されてきたのか・いるのか、また死を基底とする不安感や社会や文化の変動に応じてどのような様相を呈することになるのか。このような問いについて社会理論の観点から考察することがこの授業の目的である。

文学部04190044

特任教授 会田 薫子「死生学特殊講義Ⅳ」（臨床死生学・倫理学の諸問題Ⅰ） S1+S2 水6 法文二
号館一番大教室

臨床死生学および臨床倫理学の諸問題に関して、本学内外の研究者の研究発表とそれに基づく
討議を行う。発表者およびテーマについてメールにて予め知らせるので、履修者・聴講者はメ
ールアドレスを予め担当教員に知らせ、発表予定のテーマに関して予習した上で授業に参加す
ることが望ましい。医療・介護の現場の実践者ないし現場に臨む研究者の発表が多く、現代社
会における実際の課題について理解し考察を深めることを中心とする。当該学問領域の理論的
な進展も扱う。なお、発表者の都合によって授業時間が若干変動することもあるので、履修希
望者は初回のオリエンテーション等に参加し、予め担当教員に具体的な計画について問い合わ
せること。

文学部04190045

特任教授 会田 薫子「死生学特殊講義Ⅴ」（臨床死生学・倫理学の諸問題Ⅱ） A1+A2 水6 法文
二号館一番大教室

Sタームに続き、臨床死生学および臨床倫理学の諸問題に関して、本学内外の研究者の研究発
表とそれに基づく討議を行う。発表者およびテーマについてメールにて予め知らせるので、履
修者は下記「授業計画」の項目にあるサイトから「死生学・応用倫理センター メルマガ」に
登録することが望ましい。

発表は医療・介護の現場の実践者ないし現場に臨む研究者のものが多く、現代社会における実
際の課題について理解し考察を深めることを中心とする。また、当該学問領域の理論的な進展
も扱う。なお、発表者の都合によって授業時間が若干変動することもあるので、履修希望者は
初回のオリエンテーション等に参加し、予め担当教員に具体的な計画について問い合わせるこ
と。

文学部04190046

特任教授 会田 薫子「死生学特殊講義Ⅵ」（臨床老年死生学入門） A1+A2 木3 法文二号館一番
大教室

超高齢社会における臨床死生学と臨床倫理学の問いに関する理解と思索をめざす。

予定トピック：超高齢社会の医療とケアに関わる諸問題（人口動態、加齢のプロセスに関わる
臨床的な諸問題、医療と介護の制度、End-of-Life Care (EOLC) の概念、EOLCと緩和ケアとそ
の心理・社会・スピリチュアル面の諸問題、生命維持とその差し控え・終了に関わる問題、尊
厳死・安楽死・医師による自殺ほう助など）。

文学部04190047

特任准教授 早川 正祐「死生学特殊講義Ⅶ」（共感とケアの哲学） S1+S2 木3 法文一号館113教
室

臨床（教育）の場において、共感やケアの重要性が盛んに指摘されている。にもかかわらず、
その内実はそれほど分析的に吟味されていない。こういった現状を踏まえ、臨床をめぐる倫理
における鍵概念である「共感」と「ケア」について、それが指示する事象の豊かさを尊重する
仕方、その意味内容を批判的に検討していきたい。

より具体的には、英語圏で1980年代以降に登場してきたケアの倫理 (Ethics of Care) において、
共感やケア、またそれらの概念と不可分な、ニーズ・応答責任 (responsibility) ・脆弱性
(vulnerability) ・依存性 (dependency) ・受容性 (receptivity) といった概念が、どのようなも
のとして捉えられてきたのかを検討する。とりわけ、ケアの倫理の代表的な論者であるキャロ
ル・ギリガン、ネル・ノディングズ、エヴァ・キテイの議論を丁寧に見ていくことで、人間の
傷つきやすさと依存性を根本に据えるケアの倫理が、主流の倫理学（もちろん一枚岩ではない

が) に対して、どのような独自の貢献をしようのかを批判的に考察する。

文学部04190048

特任准教授 早川 正祐「死生学特殊講義Ⅷ」(認識をめぐる不正義と責任:現代認識論の一展開)

A1+A2 水2 法文一号館112教室

2010年代以降、英語圏の認識論で盛んに論じられるようになった「認識をめぐる不正義」(epistemic injustice)の問題と、その不正義を是正する「認識をめぐる責任」(epistemic responsibility)の問題を考察する。そのことを通じて、「認知する」や「認識する」といった営みに否応なく孕まれている倫理的な次元を、その社会的な含意も踏まえつつ、明らかにする。

哲学の分野においては、認識論と倫理学は別々の領域に属するものとししばしば——「常に」ではないが——見なされてきた。しかしながら、私たちの具体的な生活の場面を考えてみると、多くの場合、倫理の問題は同時に認識の問題でもある。例えば、疾病や障がいによる差別、性別による差別、人種による差別においては、認識自体が、力関係によって媒介され、相対的に弱い立場に置かれた者は発言権を奪われ、沈黙を余儀なくされることがある。また勇気をもって窮状を訴えたとしても、それは正当な証言としては見なされず軽視されるかもしれない(「証言をめぐる不正義」)。さらに言えば、そもそも、当事者の苦境にたいして、周囲の人々の関心が低いため、その苦境を表現する言葉が開発されず、その結果、本人はその苦境を訴える言葉自体を奪われているかもしれない(「解釈をめぐる不正義」)。

本講義では、まず主にフェミニスト認識論(ないし社会的認識論)による「認識をめぐる不正義」論の基本的な発想・概念を概観・検討する。その際、臨床の文脈において、その基本的な発想・概念が、どう発展的に捉えられるのかにも触れたい。そのうえで、そういった不正義に対して私たちはどのような責任を負っているのかも批判的に考察する。そこでは同時に、潜在的偏見(implicit bias)・故意による無知(willful ignorance)・責められるべき無知(culpable ignorance)に対して、私たちはどのような点で責任を負うのかも検討することになる。

文学部04190049

特任准教授 早川 正祐「死生学特殊講義Ⅸ」(自律についての関係的なアプローチ) A1+A2 木4

法文一号館214教室

1990年代から2000年代にかけて英語圏で新たに登場してきた「関係的な自律論」(relational autonomy)について批判的に検討し、その臨床的応用も試みる。

従来の個人主義的な自律論は、個人の独立性と他者からの不干渉を基調とする自己決定を核としてきた。それに対して関係的な自律論は、人間の相互依存性と傷つきやすさに着目し、一定の依存関係や社会的環境の中で育まれるものとして自律を捉える。講義では、関係的自律論において、従来の自律論の中心的諸概念、すなわち、自己決定・反省性・合理性・自己理解・統合性等がどう捉え直されているのか、またどう捉え直されるべきなのかを考察する。その上で、医療従事者・患者・患者家族、それを取り巻く社会的/文化的環境という要素を考慮しつつ、関係的な自律の概念を、臨床における共同的意思決定プロセス(shared decision-making process)に相応しいものへと発展させる。

文学部04190050

准教授 乗立 雄輝「死生学特殊講義Ⅹ」(死生をめぐる諸問題についての偶然と確率の視点からの考察) A1+A2 水4 法文一号館214教室

死と生をめぐる諸問題に、偶然や確率という事象、概念、およびそれらにまつわる諸理論がどのように関わっているのか、もしくは、関わりうるのかを考察する。

各人にとって自身の生と死は一度きりの事象であり、いずれはみな死に至ることが確実と考えられるにもかかわらず、しかし、ある意味では、そうであるがゆえに、死と生をめぐる私

たちの思考には、意識するか否かにかかわらず、確率や偶然（性）にまつわる思考が深く関わっている。

また、人間は、不慮の偶発的事態に起因する不具合や不幸を避けようと長年にわたって努力を積み重ね、その結果、ある程度の成果を挙げてきたが、そのことの副産物として、逆に合理的な思考ができなくなってしまったり、旧来の倫理規範や価値観がゆらぐ事態が現れつつある。本講義では、生と死の問題について、偶然や確率をめぐる議論がどのようにかわるのかを、様々な哲学者たちの主張に注目しながら考察していくことを試みる。

文学部04190071

教授 小松 美彦「応用倫理特殊講義Ⅰ」（先端医療と死生観） S1+S2 金4 法文一号館217教室

近年、世界的に安楽死・尊厳死が推進されている。しかも、それらの言葉が使用されないまま推進される傾向にある。たとえば、アメリカでのPLOST(Physician Orders for Life Sustaining)、カナダでのMAID(Medical Assitance/Aid in Dying)であり、日本での「終末期医療」や「人生の最終段階における医療・ケア」である。もはや安楽死・尊厳死は、私たちがイメージしがちな「安らかに死ぬ」というものとは異なり、一定の人々に対するいわば死の強制にほかならないものになりつつあるのだ。

本講義では、日本と世界のこのような現状に鑑み、安楽死・尊厳死について多角的に検討し、それらが推進される構造を生権力（ミシェル・フーコーが示した権力概念）と医療経済の観点から分析する。そして、こうした考察作業を通じて、「人間にとって死とは何か」「人間の尊厳とは何か」を探究する契機を獲得する。

文学部04190072

非常勤講師 田中 智彦「応用倫理特殊講義Ⅱ」（現代の「野蛮」に抗うために） A1+A2 金4 法文一号館217教室

この授業では「野蛮」をキーワードに現代社会の諸問題を考察するとともに、それを通じてそうした「野蛮」に抗うための諸条件を——とりわけ倫理の観点から——探究してゆく。

ここで「野蛮」とはさしあたりコント＝スポンヴィル（André Comte-Sponville）の定義に拠る。すなわち「野蛮とは、残酷さや暴力に尽きるものではなく、いかなる上位の価値も認めず、つねにより低いものしか信じず、より低いものにおぼれ、それをほかのすべてのひとにまでおよぼそうとする態度のこと」であり、それは「技術主義の野蛮」「リバータリアニズムの野蛮」「全体主義的野蛮」「民主主義的野蛮」として現れる。

こうした視点から今日の科学技術や政治経済のありよう——それらはたいてい深く結びついている——を考察するとき、どのような問題が浮かび上がってくるだろうか。またそうした諸問題はどのような来歴をもっているのだろうか。そして、私たちの生きる「現在」と、そこへとつながる「過去」とをふまえるとき、私たちは「未来」をどのように描くべき／描きうるのだろうか。

現代の「野蛮」の下で、いまや「人間の人間性」とも言うべきものが深く損なわれつつあるように思われる。そうした中で、私たちがなおも倫理的でありうるとしたらどのようにしてなのかを、20世紀の社会理論や政治理論、科学思想史なども繙きながら、探つてゆくことにしたい。

文学部04190073

非常勤講師 関 礼子 「応用倫理特殊講義Ⅲ」（環境と災害を「物語る」） A1+A2 木4 法文一号館315教室

環境とは社会である。この講義では、＜環境—社会＞をめぐる諸問題をめぐる人々の語りと生の全体性のなかから、＜倫理＞の位相を探り出す。特に戦後日本の急激な＜環境—社会＞変動

のなかで、地域性や共同性に基づくローカルな価値が集権的公共性の価値の劣位に組み入れられることで、〈環境—社会〉が乖離していく状況を考察する。そこから、環境をめぐる現在の諸課題を明らかにする。具体的な事例として、水俣病や新潟水俣病、メガイベント開発、原発問題などを扱う。

文学部04190074

非常勤講師 村上 靖彦「応用倫理特殊講義Ⅳ」（現象学的な質的研究） S2集中 教室未定

現象学的な質的研究の方法論を習得することを目的とする。

看護師へのインタビュー、子ども支援に関わる実践者へのインタビューを扱う。急性・重症患者看護、在宅看護といったいくつかの領域の専門看護師で指導的な立場にある人たちにお願ひしたインタビューデータおよび、保育園やこども食堂など地域での子ども支援に関するフィールドワークデータを用いて現象学的な質的研究の進め方へのイントロダクションをはかる。授業の中で参加者にデータ分析を行ってもらい機会も設ける予定である。

文学部04190075

堀江 宗正「応用倫理特殊講義Ⅴ」（環境思想） A1+A2 火3 法文一号館114教室

環境倫理を学ぶためには、頻発する自然災害、気候変動に対応する国際的枠組みなど、日々アップデートされる知識と、倫理学としての議論の蓄積とを往復しなければならない。この授業では最近日本で出されたテキストを手掛かりとしながら、最新の動向を学ぶことを目標とする。

教育学部09191402

大塚 類「臨床現象学概論」（具体事例に基づき臨床現象学を学ぶ） A1+A2 木2 国際学術総合研究棟三番大教室

臨床現象学では、私たちが日常生活において体験するさまざまな出来事を「事例」として、現象学や哲学の観点から考察することを試みる。事例に基づく質的研究の一種だと言えよう。

本講義では毎回、若者・家族・教育にまつわる個別具体的な事例を取り上げる。講義者が体験したり見聞したりした出来事だけではなく、マンガ、エッセイなども事例として取り上げる予定である。人間の普遍的な経験構造を明らかにしようとする学問である現象学には、「個別は普遍に通じる」という言葉がある。個別具体的な事例を深く考察できれば、「私にも思い当たる節がある」、「そういうこともありうるかもしれない」という形で、普遍的な人間理解へと繋げられるであろう。受講者が自分事として当事者性をもって臨めるような身近なトピックを、深く考察することを通して、物事を見る観点や、自己／他者理解が深まることを目指す。

医学部02218

教授・准教授・助教 赤林朗、瀧本禎之、中澤栄輔、山本圭一郎「生命・医療倫理Ⅰ」 A2 金1/2 医学部三号館S101

本講義では、保健・医療の分野においてしばしば生じる意思決定が困難な問題を、主に倫理的側面から検討する。授業では、医療倫理学の基礎理論を講義するだけでなく、具体的なケースを用いたディスカッションも行うため、受講者の積極的な参加が望まれる。

本講義は、将来に臨床や医療政策に携わる人にとって有益であるのはもちろんだが、それ以外の人にとっても、いろいろな立場の人との議論を通じて、自分の倫理的思考を見つめ直すよい機会となる。

医学部02246

教授・講師・助教 上別府圭子、佐藤伊織、キタ幸子、副島堯史「家族と健康」 A1 月1/2 医学部三号館1FN101講義室

健康総合科学の対象としての、家族と健康の考え方の基礎を学ぶ。家族は社会を構成する最小単位であり、また、家族は一単位として健康総合科学実践の対象となる。国内外の、家族心理

学・家族看護学・家族療法などにおける知見および理論を学び、さらに事例を通して、その実践の試みについての見識を深める。加えて、家族を健康総合科学研究の対象とする際に必要な基礎的知識と考え方を理解する。

農学部060500021

教授 関崎勉「生命倫理」 1単位 S1 月5 農学部一号館第8講義

ヒトはヒト以外の生命を喰うことによってしか生きられないという人間中心主義的な宿命を負う。一方、人間社会の利益、科学技術の進歩、ヒトとヒト以外の生き物との間での命の価値の違いなど様々な理由でヒトや動物の命の扱い方が異なっている。人の社会と人の生命における倫理問題だけでなく、生物資源問題、動物倫理、ヒトと動物の絆、食品安全、家畜防疫、感染症など、「食」に関わるさまざまな生命の関わり方を取り上げる。それらを様々な角度から実例をもとに聴講し、農における生命倫理として多層な生命をどう秩序立てて理解し、人類の福祉を追究すればよいかを、自身の専門分野とは異なる立場からの情報も取り入れて、これまでとは違う発想、価値観、文化、思想などについて考える機会とする。

バイオテクノロジーと社会との接点の問題という性質では、A2タームの「技術倫理」と関連する。

農学部060500031

教授 根本圭介「技術倫理」 1単位 A2 月5 農学部一号館第8講義

食と生活を中心に現代の科学技術と社会との接点において、価値観を伴って判断を下さなければならぬ、ときに相矛盾するさまざまな相互作用を多方面から学ぶ。食の安全をめぐるリスク科学の基礎、生産者・流通関係者・消費者・行政の立場からのリスク評価/リスク管理/リスクコミュニケーション、具体的な安全性評価と技術管理、コミュニケーションのあり方を考える。

教養学部08D1002

准教授 鈴木 貴之「応用倫理学概論」 2単位 A1+A2 曜時限未定 教室未定

テキスト講読と議論を通じて、生命倫理学を中心とした応用倫理学の主要問題を学ぶ。受講予定者は初回授業までにICT-LMSに仮登録をするか、メールアドレス (tkykszk@g.ecc.u-tokyo.ac.jp) まで連絡してもらいたい。

教養学部08F1304

客員准教授 松本真由美「科学技術リテラシー論Ⅱ」 2単位 A1+A2 曜時限未定 教室未定

本講義では、担当主教員のほか、科学コミュニケーションが求められる現場の第一線で活躍するゲスト講師をお招きし、実践的な科学コミュニケーションについて学ぶ。学生は自らの科学コミュニケーター像を想定し、「伝える」「聞く」「質問する」「議論の調整」など科学コミュニケーションのスキルを養成するとともに、科学についての正しい情報をいかに社会に伝えるかを考察し、演習する。